南蛮の風紀行－20 トレド・ノスタルジックー2

伊東マンショたち天正遣欧使節がトレドに滞在した時、この町は製鉄と冶金の町でした。今でもこの町の土産物は鉄をはじめ金属のものが多く、ショーウインドには古風な剣や

盾、鎧までありました。製鉄にせよ冶金にせよ、そのためには膨大な量の炭と水が必要となります。水はタホ川からくみ上げるとして、炭、当時は木炭でしたがそれはどうしていたのでしょうか。イベリア半島中央部のメセタと呼ばれる高原地帯は、当時も今と同じような気候でしたでしょうから、大量の木炭が手に入るとはとても思えません。それとも、そのことによって森林が破壊された結果として、現在のメセタの気候になったのでしょうか。そんな自然破壊と結果としての文明の衰退という歴史は、世界中にありふれています。今度の旅のテーマではないのですが、一度調べてみる価値があるかもしれませんね。

さて、天正遣欧使節の事です。彼らがここトレドに２０日も滞在したのは、実はよんどころない理由がありました。

使節のメンバーの一人千々石ミゲルが天然痘にかかってしまったのです。天然痘は当時、恐ろしい死病の一つでした。千々石ミゲルはトレドに着くなり高熱を発し、やがて口の中をはじめ全身に水泡・膿疱を発症しました。天然痘（痘瘡）の潜伏期間は数日から十数日なので、彼がどこで感染したのかは不明です。しかし、引率していた神父たちは勿論、スペインの人々も当時の最先端の医療を施しました。それが効を奏した結果、元々蒲柳の質だったミゲル君ですが、当時、発病者の３割が死亡するというこの病気から逃れることが

できました。最初の発熱から１６日目に平癒したと報告されています。

１５歳の少年がふるさとを遠く離れた異国の地で大病してしまったのですから、彼がどんなに心細かったか想像を絶するものがあったことでしょう。メンバーの３人が仲間の平癒を神に祈願するために毎日通ったカテドラル（大聖堂）はその規模と内部装飾の素晴らしさで、彼らがリスボンで見たサン・ジェロニモ修道院の聖堂に勝るとも劣らなか

ったようです。瀉血など西洋風の外科療法も彼らの度肝を抜いたことでしょうが、神への信仰心も更に高まったことも想像に難くありません。

さすがに金属の町です。カテドラルの内部装飾の技術的なレベルと言い、金銀を多用した豪華さと言い、見事としか言いようがありませんでした。

ところで彼等がトレドを訪れた時、この町にはドメニコス・テオトコプーロスという名前の有名が画家が住んでいました。残念ながらこの本名ではあまり知っている人はいません。でもエル・グレコという名前なら知らない人も少ないことでしょう。彼が描いたトレドの遠景は今でも、この町を訪れたことのない人々にもノスタルジーを感じさせるほど有名です。

エル・グレコとは「ギリシャ人」という意味の謂わばあだ名ですが、定冠詞がつけられているので「ギリシャ人中のギリシャ人」という感じで呼ばれていたことになります。いくら当時のスペインとはいえギリシャ人が一人しかいなかったわけではないでしょう。ヨーロッパの人々のギリシャ文明に対するあこがれにも似た尊敬の心情を考えると、エル・グレコの当時のスペインでの地位が、なんとなく想像できます。

彼はトレドで亡くなり、この町で今も眠っています。彼が住んでいたとされる家は、そのまま「エル・グレコの家」と呼ばれる美術館になっていました。もっとも、わたしはプラド美術館に展示されている３枚の有名な絵も含めて、彼の作品はあまり好きにはなれません。結局「エル・グレコの家」の前を通り過ぎてカテドラルの方に時間を割きました。それに気になるのは彼がすでに名声を博していた時期に、伊東マンショたちがトレドに来

たのですが、接触があったという記述は見当たりません。何となく不思議な気がしています。

話は変わりますが、左の写真で分かる通りタホ川とトレドの旧市街地はだいぶん落差がありますが、少年たちが滞在した当時、つまり１６世紀に、既に水力を利用して、タホ川の水を町まで組み上げる揚水装置がありました。

その揚水装置を作ったのはイタ

リア人のジャネリオ・トゥルリア―ノだそうです。病気の千々石ミゲルを除く３人の少年たちもこの装置とともに、ジャネリオご本人にも会っています。ジャネリオは親切に相手をしてくれ、彼が人生を傾けて製作したという、時計の原型になるような機械も見せてくれたようです。少年たちが目を丸くして彼の機械に見入っている姿を想像すると微笑ましくなります。

さて、石の文明に食傷していたわたしが、どうしてこのトレドの町にだけは、親しみを感じたのかを、わたしは今でも考えています。この町は長い間、東西文明、あるいは３つの宗教（ユダヤ教・キリスト教・イスラム教）が共存し、互いに自分たちの得意分野を大切にし、他の人々の得意分野を自分たちの生業にも生かしていたそうです。ところが折角、中世から近世にかけてイスラム教徒から領土を取り戻したキリスト教徒はイスラム教徒だけでなく、ユダヤ人も排撃して追い出してしまいました。

近代以降の北部ヨーロッパの隆盛とともに、イベリア半島が過去の繁栄にも関わらず、グローバル社会から後退しているよう印象を与えているのも、実は十字軍に代表されるキリスト教原理主義（そんなものがあるのかどうかは知りませんが）によって、オリエントの文明やユダヤ人の金融面での実力を過小評価してしまった結果なのかもしれません。

もともと古い順からユダヤ教・キリスト教・イスラム教は同じ神の末裔なのです。コーランにも旧約聖書に出てくるアダムとイブの楽園追放の話や、ノアの箱舟の話さえあるくらいなのです。遠い昔、イスラム教徒の支配下だったとはいえ、同じ神の末裔同士が共存共栄していたという事実が、わたしをひきつけているこの町の雰囲気を醸し出しているのかもしれません。